怪奇とロマンティシズムの作家…金沢市出身

泉 鏡花

泉鏡花記念館（金沢市下新町）より図録「鏡花：泉鏡花記念館」を寄贈頂きました。
鏡花と創立当時の本校教員が親交があり、図録には「金商七十年史」より写真提供をしています。
これを機会に鏡花の人物紹介や作品を少しだけ紹介します。興味を持った人は、ぜひ図書館で作品を手に取ってみてください。

泉鏡花
本名：泉鏡太郎（明6.11.4～昭14.9.7）
金沢市下新町二十三番地に生まれる。17歳のころ上京。翌年尾崎紅葉の玄関番として住み込み、小説修行に励んだ。『義血侠血』『外科室』など発表を経て、『高野聖』などで人気作家となる。幻想文学の先駆け、金沢三文豪として有名。

泉鏡花といふ人

〈ペンネームの由来〉
作家名**鏡花**は、「共に美しいが一緒に手にすることはできない」という意味の「**鏡花名水**」から名付けられた。

〈美しきものへのこだわり〉
若く美しかった母を幼少期に亡くした鏡花は、**美と女性**を至上のものとして生涯書き続けました。

〈スーパー！潔癖症〉
鏡花の**潔癖症**は有名で、生ものは食べない、「豆腐」の「**腐る**」という字を嫌って「豆府」と書いていた、など数多い。

金沢が舞台の作品

「義血侠血」
白糸大夫は偶然出会った法律家をめざす青年・欣弥を援助するため、図らずも殺人を犯してしまう。その事件の裁判には検事となった欣弥がいた…。
中の橋から天神橋に続く浅野川沿いの道に「滝の白糸」像（「義血侠血」が原作の戯曲）があります。

「照葉狂言」
母を失った少年が年上の女性と出会い、慕っていましたが、育てられている叔母の目もあって、なかなか想いを告げることができないでいた。下新町が舞台とされ、鏡花が幼いころ母を亡くした悲しみを写し取るような作品。

「由縁（ゆかり）の女」
金沢卯辰山に葬られた両親の骨を東京へ持ち帰るため帰郷した主人公麻川礼吉の悲しい人生を描いた作品。主人公の「麻川」の名は鏡花が慣れ親しんだ「浅野川」きているといわれている。

小説しか読まないあなたも、きっとハマル本が見つかるはず。

新書、読んでみようよ。

読みやすくておすすめの新書（タテ18cm前後の本）を紹介します。

1行バカ売れ/
川上徹也著（角川新書）

商品のPOPやCMで流れている言葉で、売れ行きが格段に違います。そこには「言葉の力」があり、商品の「物語」がにじみ出ています。

理系アナ枡太一の
生物部な毎日/枡太一著
（岩波ジュニア新書）

人気アナウンサーの生物漬けの日々を綴った青春記。著者のまじめさと情熱をうかがい知ることができる1冊。

多数決を疑う/
坂井豊貴著（岩波新書）
選挙から皆で何を食べに行くかを決めることまで、広く使われる多数決。でも本当に民主的な方法なのか。よりよい社会を考えていく上での大きな問題です。